

012-21

大腸ポリペクトミーにおける前処置の検討

盛岡赤十字病院 消化器内科

○北田 愛恵、新沼 優美、伊藤 由有

【目的】

患者の夜間睡眠が確保できるように、大腸ポリペクトミーの前処置を変更する。

【方法】

大腸ポリペクトミー対象患者で現行の前処置群（以下現行群）と、下剤内容・投与時間・食事内容を変更した新前処置（以下新群）の排便・睡眠状況をアンケート調査し比較検討する。また、看護師に患者の睡眠状況や新前処置のアンケートを行う。

【結果】

現行群（17例）と新群（18例）では、全体の排便回数は平均16回から11回、23時から3時までの排便回数はいずれも24回から7回、便の出来上がりの時間は平均3.17時間から2.5時間、高圧浣腸の追加処置は1名から0名、不眠は6名から3名、良眠は10名から13名であった。看護師16名中、不眠の訴えを聞いたのは現行群で10名、新群では0名であった。全員が便の仕上がり早いしきれいで問題ないと答えた。業務では、夜勤の処置内容が減り業務の重複が減った。

【考察】

現行群に比べ新群は、全体の排便回数も少なく、便の仕上がり時間は短縮され追加処置も減り患者の負担を軽減すると考える。排便回数では、現行群と新群とで23時以降の夜間回数的大幅な減少があり、不眠の訴えの減少、良眠できたとの回答の増加から、夜間の排便の負担が少なく新前処置は良策と考える。新群では患者の不眠の訴えは少なく「よく眠れた」と話されることもあった。看護師の回答からも、新前処置は患者の夜間排便の負担が少なく睡眠が妨げられにくいと考える。

【結論】

- 1、新前処置での便の仕上がりはよりきれいで、変更内容は適切だった。
- 2、23時以降の排便回数が減り、良眠を感じる患者が増えた。
- 3、排便回数と仕上がり時間が短縮し、追加前処置も減り患者の負担が減少した。

012-23

心臓リハビリテーション記録用紙使用状況の分析

日本赤十字社和歌山医療センター 集中治療室

○岩下 裕美、吹田奈津子

はじめに

心血管疾患リハビリテーション（以下心リハとする）は、運動療法のみではなく包括的心臓リハビリテーションとして行われることが望ましい。当センターでも、平成24年9月からリハビリ室での心リハを開始した。以前よりICU、病棟それぞれで心リハを実施しており、それぞれが異なった記録用紙で進行状況を記録していた。今回、リハビリ室での心リハ開始に伴い、他職種が様々な場面で患者に関わるようになったため、入院から退院まで他職種が情報共有できるツールの必要性を感じた。そこで、今回ICU入室時の急性期から退院まで一貫した記録用紙を作成・導入し、その使用状況と患者への指導内容の変化について調査した。

研究方法と結果

心臓リハビリテーション記録用紙（以下記録用紙とする）を作成し、ICU・病棟・リハビリ室で、医師・看護師・理学療法士が記入した。その記録用紙の記入状況と患者への指導内容の変化を調査した。記録用紙を入院時から記録していくことによって、病棟間および他職種間での情報共有ができた。今後も継続することによって、患者の退院後の生活の変化や再入院率の変化につながる包括的リハビリテーションの実施のために役立てたい。

012-22

看護が見える記録への取り組み

富山赤十字病院 看護部

○広幡 千春

【はじめに】当病棟は循環器病棟であり、看護記録の内容は循環動態に関する記録が多く、患者・家族との関わりの記録は少ない状態であった。そこで患者・家族との関わりなど「看護が見える記録」を「ナイス記録賞」として提示し、さらに病棟勉強会で表彰することで個人を承認する取り組みを行い3年が経過した。承認することで看護と記録に対する意欲が向上し、看護の姿勢に影響を与え「看護が見える記録」へと変化がみられたので報告する。

【方法】1.記録賞で記録を承認されたスタッフ18名を対象にアンケート調査を実施し、看護と記録に対する意識・行動変化について分析した。2.記録賞を選ぶ側のスタッフ5名に看護と記録に対する意識・行動変化について聞き取り調査を行い、分析した。

【結果】1.16名から回収し結果は、看護の見える記録を意識して関わるように変化した人は13名であった。また、記録賞で承認されたことで看護と記録に対する意欲の向上に繋がった人は14名であった。2.記録賞を選ぶ側も看護の視点で記録を監査し、患者・家族との関わりが弱く個別性のある指導に繋がっていないことに気付き、啓蒙を図るなど記録グループの一員として意識し関わるように変化がみられた。

【考察】記録賞は記録の見本としてだけでなく、看護の視点として心筋梗塞や心不全の患者・家族の不安な思いに寄り添う姿勢に繋がりを、また生活改善に向けた視点で情報収集し、個別性のある指導に繋げるなど意図的に関わる看護の姿勢に影響を与え、「看護が見える記録」へと繋がった。また記録賞として提示するだけでなく個人を承認することが看護師個々の看護を認め、看護と記録に対する意欲の向上に繋がりを、より良い記録や看護への動機づけとなった。

012-24

A病院HCUの看護チーム合併の取り組み 第二報

旭川赤十字病院 HCU

○村住 英也、阿部 美香、伊藤千鶴子、澤田ますみ、三上 淳子

【目的】平成20年に開設したHCUでは、重症度により2チーム制をとってきた。看護体制の評価・検討のため行った第一報では、業務内容、精神的負担などチーム間で差があることが明らかになった。合併に向けて業務改善や教育体制を見直し、平成25年2月よりチーム合併をした。新たな看護体制の評価と課題を明確にしたので報告する。

【研究方法】期間は平成25年3月、対象は前回アンケートの協力が得られたHCUスタッフ34名。新体制に関する意識についての12項目、合併後の良いところ、今後の問題点を選択式、自由記載とした。合併前後の比較はWilcoxonの符号付順位検定を用いた。倫理的配慮として、本研究で得られたデータは研究以外で使用しないことを書面で説明し、アンケート提出をもって同意とした。

【結果】アンケート回収率は100%。合併前後の比較では、「仕事量と質は適当」、「体制に満足」、「精神的負担が少ない」で有意差を認めた。(P<0.05)有意差は認めないが、「働きがいがある」「チームワークは良好」で高い値を示した。問題点として、重症集中ケアの経験や個人能力の差があることがあげられた。

【まとめ】今回の調査結果から、チーム合併により仕事量・質の差がなくなり適正に業務分担がなされ、働きがいがあり、新体制に満足していることが分かった。マンパワーの有効活用や業務内容の均一化がなされたと考える。経験や能力の差があるという問題点に対しては、教育チェックリストを活用して、個々の知識・能力を評価した。それをもとに、各々に必要な重症集中ケアのシミュレーション教育を実施した。今後の課題は、新看護体制が、どのように患者ケアに反映されているかを検証することがあげられる。